

# 大学体育実技における集団凝集性, 集合的効力感, 主観的恩恵の関係

野上 幸希 (兵庫教育大学)

## 1. 目的

大学体育実技では, 様々なスポーツ種目を取り扱いながら, 小集団を編成した活動形態を取ることが多い. そういった集団での活動中に, 集団凝集性あるいは, 集合的効力感がどの程度認知されたのかによって, 主観的恩恵の評価も異なるのではないかと考えられる.

そこで本研究では, 大学体育実技における集団凝集性および集合的効力感の認知が主観的恩恵に与える影響について検討することを目的とした.

## 2. 方法

- 1) 対象者および調査時期: 2019年度前期の体育実技科目を受講した171名を対象に, 質問し調査を2020年7月に実施した. 回答が得られた115名(回収率67.3%)を分析対象者とした.
- 2) 調査内容および手続き: 岡澤ほか(1999)の体育授業における集団凝集性(課題凝集, 対人凝集)を測定する尺度, 荒井(2011)の心理的パフォーマンスコレクティブ・エフィカシー尺度, 西田ほか(2016)の体育授業の主観的恩恵評価尺度(運動スキル・練習方法の習得, 協同プレーの価値理解とコミュニケーション能力の向上, ストレス対処とポジティブ感情の喚起, 体力・身体活動の増強, 規則的な生活習慣の確立)からなる質問紙を, Google フォームを利用して実施した.
- 3) 統計解析: 体育授業の主観的恩恵評価尺度の各下位尺度得点をそれぞれ従属変数とし, 体育授業における集団凝集性を測定する尺度ならびに心理的パフォーマンスコレクティブ・エフィカシー尺度の各下位尺度を独立変数とした, ステップワイズ法による重回帰分析を行った. 有意水準は5%とした.

## 3. 結果と考察

重回帰分析の結果は以下の通り確認された.

### 1) 集合的効力感の主観的恩恵への影響

集合的効力感の認知は, 運動スキル( $\beta=.66$ ), 協同プレー( $\beta=.42$ ), ストレス対処( $\beta=.51$ ), 体力・

身体活動( $\beta=.41$ )および規則的な生活( $\beta=.28$ )に有意な正の影響を示すことが確認された. これは, 体育実技において集合的効力感を強く認知している学生ほど, 授業を通じて運動・スポーツの意義や恩恵についてどのように知覚できたのかといった主観的恩恵を高く評価することを示唆している.

### 2) 課題凝集の主観的恩恵への影響

課題凝集の認知は, 運動スキル( $\beta=.17$ )に有意な正の影響を示すことが確認された. これは, 体育実技において課題凝集を強く認知している学生ほど, 授業を通じて自身の実施種目に対する基礎的・発展的な運動スキルが上達したと捉え, さらにルールや, スキルを上達させるためのコツおよび効果的な練習方法について理解できたなどの恩恵を高く評価する可能性があることを示唆している.

### 3) 対人凝集の主観的恩恵への影響

対人凝集の認知は, 協同プレー( $\beta=.45$ ), ストレス対処( $\beta=.43$ ), 体力・身体活動( $\beta=.34$ )および規則的な生活( $\beta=.33$ )に有意な正の影響を示すことが確認された. これは, 体育実技において対人凝集を強く認知している学生ほど, 協同プレー, ストレス対処, 体力・身体活動および規則的な生活への評価も高くなる可能性があることを示唆している.

## 4. 結論

本研究では, 集合的効力感からは主観的恩恵の全ての下位尺度に有意な正の影響を示すことが確認された. また, 集団凝集性の下位尺度である課題凝集からは運動スキルに, 対人凝集からは協同プレー, ストレス対処, 体力・身体活動, 規則的な生活に有意な正の影響を示すことが確認された. 本研究で用いた体育授業の主観的恩恵評価尺度(西田ほか, 2016)は, 大学における保健体育科目の4つの教育的効果(身体的効果, 精神的効果, 社会的効果, アクティブな日常生活の運動行動の促進効果)をもとに作成されたものである. したがって, 大学体育実技において, 集団凝集性および集合的効力感を高めることは, これらの教育的効果を高めるのに有効であることが示唆された.